

Digest of Science of Labour

労働の科学

2024
October
Vol. 79, No. 10



カタチとイメージの間／菅沼 緑

特集

よりよい職場環境づくりに取り組む企業のカ(3)

多様性を認め合い誰もが幸せになる働き方にチャレンジ／株式会社ソフツー
スキルを活かしてセカンドキャリアにチャレンジ／株式会社トクナビ
従業員の経営意識向上を目指して／HTC 株式会社

巻頭言

代わりに覚えておく人
草野信子

連載

労研アーカイブを読む⑩
椎名和仁

凡夫の安全衛生論議⑤
福成雄三

自由と想像②②
菅沼 緑

軽労働化で農業の再生⑦
宇土 博

ILOインド南アジア産業安全保健通信②②
川上 剛

労働の科学

2024
October
Vol. 79 No. 10

巻頭言 俯瞰 (ふかん)

代わりに覚えておく人

草野 信子 [詩人] 1

表紙作品：菅沼 緑 「カタチとイメージの間」

材料：木材

会場：ギャラリー・フリーダムスペース (神奈川・藤沢市)

年度：1995年

撮影：安斎重男

表紙デザイン：大西文子



よりよい職場環境づくりに取り組む 企業のカ(3)

多様性を認め合い誰もが幸せになる働き方にチャレンジ

..... 株式会社 ソフトゥー 4

スキルを活かしてセカンドキャリアにチャレンジ

..... 株式会社 トークナビ 8

従業員の経営意識向上を目指して

..... HTC株式会社 13

Special contribution

特別寄稿

高齢単身世帯の増大の背景とその課題

..... [佛教大学名誉教授] 金澤 誠一 17

Series

ILOインド南アジア産業安全保健通信 (22)

デューデリジェンスとサプライチェーン

..... 川上 剛 29

Series

- 軽労働化で農業の再生 (7)
農業における前屈姿勢 (腰部負担) 軽減対策
 —③対策事例 (2)—
 各論第6回 宇土 博 32
- タイプライターの歴史とタイピスト (10)
 —タイピストのモデル化と日本における英文タイプライターの開発—
 三宅 章介 44

Column

- 自由と想像 (22)
カタチとイメージの間 菅沼 縁 54
- 凡夫の安全衛生論議 [疑問と思い込み] (5)
資格者が欠かせないが
 ～法定の技能講習について思う～ 福成 雄三 55
- 労研アーカイブを読む (104)
石川知福博士の「随想」 椎名 和仁 58
- BOOKS
『医療エラーはなぜ起きるのか』
 医師が語る医療現場におけるエラー, そのメカニズムと超克のために必要なこと
 矢野 功二 65
- 『東京カフェ 2025, 東京おいしい店カタログ』**
 至福のひと時 椎名 和仁 66
- ろうけん川柳 67
- 次号予定・編集雑記 68

代わりに覚えておく人

草野 信子

体験したひとにしか わからない
体験していないひとは 言った

それでもなお 近づきたくて

ひとの

こころの水際までを 歩いていく

おもいを 汲む

解くこと 分けること

明かすことは できなくても
汲むことはできるだろう

わたしという小さな入れものを
沈黙をたたえた みなもに

差し入れて

おもいを 汲む

体験したものにしか わからない
体験したひとは 言わなかった

あふれていますよ と

しずかに言った

両手で汲んだ わずかなものが
わたしの指のあいだから

こぼれている

(詩「汲む」 草野信子)

東日本大震災のあとすぐに、足裏マツサージの資格をとるスクールに通って、翌年の二〇一二年の春、宮城県の、ある仮設住宅に「マツサージをするひと」として出かけました。たったひとりの小さな活動でしたが、現地でボランティア活動をしてきた人や、仮設住宅に避難されていた人たちにまで助けをもらいながら、二〇一五年にそこが閉じられるまで、年に三、四回、出かけ、三日間滞在して足裏マツサージをさせてもらいました。

上記の詩は、そのころ書きました。愛知県から出かけていく私の「無謀」を「体験したひとにしかわからないのだから」と、周りの人は案じてくれましたが、そこで出会った人たちは「体験したものにしかわからない」とは言いませんでした。そのような心配さえも感じさせず、むしろ、小さな器でしかない私が、受容できないでこぼしてしまっても、耳を傾けているかぎりには、過酷な体験、つらい日々を伝えようとしてくれました。ときに私の器からあふれてしまっても。
「他者と体験を共有していかないということに負い目をもたなくていい、わからなくても、そばに行つていいのだ」ということを、その地で、被災した人々のなかで、胸に刻みました。他者のおもいを「汲む」ことはできる。それで、詩に書いておきました。「そこのとこを、ひ



くさの のぶこ
詩人
詩集…『冬の動物園』『戦場の林檎』
『セネガルの布』『その日まで』
『持ちもの』ほか

とつ汲んでいただいて…」という馴れ合いの言葉があることが気になりつつも。

東日本大震災からの十四年、破壊的な自然災害、世界各地での戦争や内戦が止むことのない年月です。年齢を重ねた私は、被災地に出かけ、その冷たい足を手のひらで包ませてもらうこともできなくなりましたが、「体験したひとにしかわからない」という思考をしないことで、苦しみの中にもいる人たちの思っていることができるような気がしています。

先日、映像作家の小森はるかさんが、次のように書いているエッセイを読みました。「今能登には、一緒に手を動かす人、話を聞く人、代わりに覚えておく人もつと必要です」。「代わりに覚えておく人」という発想に目をみはり、その豊かさ、深さ、に感銘をうけました。



俯瞰 ぶんかん